



Title	子どもとしての民衆へのメルヒェン：グリムとそれ以前のメルヒェンの比較研究から
Author(s)	吉田, 耕太郎
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2011, 45, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

子どもとしての民衆へのメルヒェン

—グリムとそれ以前のメルヒェンの比較研究から—

吉 田 耕太郎

キーワード：メルヒェン（メルヒェン）、啓蒙、18世紀ドイツ

I. はじめに

日本でもよく知られたグリムのメルヒェン。その本来のタイトル『子どもと家庭のメルヒェン』（1812）を素直に理解すれば、メルヒェンは家庭において読まれるもの、親が子どもに読み聞かせる、ないしは子どもが自力で読むものということになるだろう。「子ども」それから「家庭」という枕詞がつけられたメルヒェンが、19世紀初頭に出版されることになった成立過程に光をあてるのが、本稿の目的である。グリムがメルヒェンを取捨選択し、そこ含まれた残酷な場面や性的な描写を削修し、文体に修正を施したことは周知の事実である。メルヒェンの成立過程として本稿で念頭に置いているのは、この種の修正や加筆ではなく、メルヒェンを取りまく文化環境の変化である。

メルヒェンは、19世紀の口承伝承への関心の高まりに呼応して突如として誕生したわけではなく、18世紀に普及した大衆向け読みものを基盤として形成されたというテーゼ¹⁾を引き受けるならば、大衆向けの読みものが、どのようにしてグリムのメルヒェンへ組み込まれるにいたったのかを考えることが問題となる。つまり19世紀には口承伝承への学問的関心が誕生し、大衆向きの読みものの来歴が調べられるようになったわけだが、それと平行して、子どもに良本を与えなければならないという教

育への関心が高まり、子どもが本に親しむ前提となる書籍の安定した安価な流通、貸本屋や図書室の整備、識字率の向上といった、印刷メディアに関連する複数の文化的条件が重なったところに、グリムのメールヒェンが誕生したと再考する必要があるのだ。

そしてまた18世紀の文学理論をひもといてみれば、魔女やら妖精が登場するメールヒェンは、現実からかけ離れた不可思議な(wunderbar)ものであり、想像力を無用に刺激するという点で、子どもには不適切な読みものとして考えられていたことがわかっている。つまりメールヒェンが「子ども」と「家庭」に受け入れられるためには、子どもの教育観や、メールヒェンの受容のされ方も大きく変化しなければならなかったはずなのである。

II. 18世紀のメールヒェン

18世紀の文学理論におけるメールヒェンの位置を確認するにあたり、メールヒェンという語の歴史をさかのぼることからはじめてみたい。

18世紀全般において、メールヒェンは、「報告」や「お話」を意味するメーレ(Mähre)に縮小辞のついたもので、「短い作り話」を意味していた。ツェードラーの大百科事典では、メーレ(Mähre)は、「本当のまたは創作された話、真実のまたは虚偽のニュース、通達、物語(Erzählung)と言い換えられるもの。また縮小辞のついたメールライン(Mährlein)は、余興または暇つぶしに披露される創作話」²⁾と定義されている。

この定義は18世紀を通して通用していたものである。アーデルンクの辞書では、「ある出来事についての報告、もっともらしい話、創作された話、この意味ではもっぱら縮小形のメールヒェン(Mährchen)を用いる」³⁾と定義され、クリューニッツの事典でもまた「評判、出来事の報告、真実の話。もっぱら娯楽を目的とした創作話には、縮小形のメールヒェンまたはメールラインを用いることが通例」⁴⁾と記されている。また『ご夫人の

『会話のための事典』では、メールヒェンは、妖精（ジン 仙女）の項を参照せよと指示されており、妖精（Fee）や邪鬼（Dschinnen）の登場する物語をメールヒェンと定義している⁵⁾。

メールヒェンが今日私たちが理解するような古い伝承に由来する物語であるという意味を獲得するには、グリム兄弟のドイツ語辞書に登場する「あらゆる民族が、その幼年時代に真実なるものとして受け取っていた話」という新しい定義を待たなければならなかった。

ところでメールヒェンには、「創作された」という意味が込められていたが、18世紀当時、創作という語には、作家の創造性のような近代的な意味は含まれていなかった。創作とは、あくまでも現実に縛られていないこと、つまり妖精や魔法使いのような現実ならざるものも描き出すことを意味していた。そしてこうした非現実的なモチーフに対して、当時の文学論では厳しい批判が向けられていた。

「妖精物語は、怠惰な小娘や優男たちの暇つぶしにしかならない。ほんのわずかなもっともらしさもこの類いの話しにはでてこないのであるから」⁶⁾。

これはゴットシェートの批判であるが、その理由は、妖精のようなモチーフが「不可思議なもの（das Wunderbare）」であるからだ⁷⁾。ゴットシェートによる不可思議なものへの批判は、その対概念である「もっともらしさ（Wahrscheinlichkeit）」から理解できる。「もっともらしさ」は、創作されたものとそれが現実にあることの類似性によって保証されている⁸⁾。「もっともらしさ」がなければ、作品は「支離滅裂の噴飯ものになってしまう」⁹⁾。つまり現実に対応物をもたない「不可思議なもの」がでてくる作品は、支離滅裂な作品であるからだった。

ただし、「不可思議なもの」も訓育という目的に限っては許容されていた。

それがたとえば寓話である。「寓話は、そのうちに、倫理的な教説を込めるために創作されたものであって、こうした役割のゆえに、より感覚に訴えるものとして創作されている」¹⁰⁾。動物が人間の言葉を操るような非現実的な世界が描かれているイソップの寓話も、その教育的効果の点で認められなければならないというわけだ。

寓話とメールヒェンの差異を論じた『イソップまたは寓話とメールヒェンの違いについての試論』(1769)でもまた、訓育的効用の点で寓話は限定的に容認されている。著者は寓話の効果を「結びつき (Knoten)」と名付け、「結びつき」の認められない、その他の作り話をメールヒェンと一括し¹¹⁾、「メールヒェンは、文学 (Schöne Wissenschaften) という領域から、紡ぎ部屋または乳母の子守り部屋へと追放されるべき」¹²⁾と論をすすめる。非現実的なモチーフが混入する大半の作品は、紡ぎ部屋で女たちが交わす無駄話、乳母が子どもたちにする作り話として唾棄されることになった。

これら「不可思議なもの」に向けられた同時代の批判から推察できるのは、訓育という大義名分で認められる非現実的なものを、それ以外から峻別しなければならないほどに、非現実的なものを描き散らした作品が巷にあふれていたという当時の読書環境である。

「メールヒェン」として括られた雑多な娯楽目的の読みものは、具体的にどのようなものであったのか。この点については、メールヒェンが「紡ぎ部屋」に追放されていたことが参考になる。文字通り『紡ぎ部屋の哲学』¹³⁾と題された本を調べてみれば、そこには「死人の顔に赤みが認められる時には、近いうちに身内からまた不幸がおきる」とか「妊婦が紡いだ糸を牝馬に結びつけると、この牝馬もまた妊娠する」といった、紡ぎ部屋で交わされる迷信の類いが数百も収録されている。

伝承、迷信、幽霊譚を雑多に盛り込んだ作り話としてのメールヒェンは、

当時の印刷物のなかで一大ジャンルを形成していた。たとえば、なかでも質量ともに抜きん出た『たくさんの厳選された珍奇な物語と興味深い出来事』¹⁴⁾ (1753) は、全千百ページに幽霊談を909話も収録し、巻末には幽霊の索引まで完備している。ここには、魔法使い、小人、守護天使（守護妖精）、魔法の水晶玉などなど、のちにメールヒェンへと引き継がれる様々なモチーフが含まれている。この他シラーの『視霊者』（1786）、ウェーバーのオペラ《魔弾の射手》の原作となる伝承を取めたヨーハン・アウグスト・アーベルが編集した『幽霊本』（1811-1815）、さらにグリムのメールヒェンの出版後にも、シャミッソーの小説の主人公ペーター・シュレミール編集と銘打った『奇跡・伝説・幽霊の本』¹⁵⁾ (1835) といった、伝説や幽霊譚が入り混じった雑多な読みものとしてのメールヒェンを収録した本が出版され続けていたのである。

同じように愛読されていたのが、ゴットシェートも批判していた妖精物語である。ペロー、ドーノワ夫人、ボーモン夫人らの作品が間断なくドイツ語に翻訳されていた。野獣に変えられていた王子の魔法が解ける『美女と野獣』や、継母に憎まれた娘が妖精の力をかりて舞踏会にかけつける『サンドリヨン』等のよく知られた話を思い浮かべればよい。『サンドリヨン』は、グリム童話では『アッシュエンブテル（灰かぶり姫）』という名で収録されているように、妖精物語もまた、古い伝承をもととする話が少なくなかった。また妖精物語の一種として、（ガラン版）『千夜一夜物語』も、18世紀初頭にはドイツ語に翻訳されて読まれていた。しかしそこに含まれる猥雑な描写から、あくまでも大人の読みものとして受容されていた¹⁶⁾。

フランスでは、これら妖精物語を集めた40巻を超える『妖精文庫（*Le Cabinet de Fées*）』（1785-1789）が出版される。そしてドイツでも、大小の妖精物語集が続々と出版されることになった。なかでも有名なのが、ヴァイマールの企業家ベルトゥーフの手がけた『万国の民の青本文庫』である。

「雑誌購読に飢えた」¹⁷⁾ ドイツの読者に向けた公刊の辞を読んでみよう。「不可思議な出来事や奇跡を、わたしたちは軽率にも信じてきた。また魔術、呪術、錬金術、動物磁気、秘密の知の数々をわたしたちは作り出してきた。結局のところ、わたしたちは不可思議なものに飢えている」¹⁸⁾。ベルトーフは、不可思議な物語への需要があることを素直に認めている。「妖精物語は、子どもから大人まで、あらゆる年齢に受け入れられるものです。全ての身分の人に、道徳、風刺、最高のお楽しみを気持ちよくお届けします」¹⁹⁾ と、不可思議さへと向けられた批判を意に介してはいない。むしろ、この妖精叢書は、女性や若者たちにとっては少々難儀な本ばかりが奨められる読書環境を改善し²⁰⁾、「子どもたちの有用で無害な遊び道具」²¹⁾ になると、ベルトーフは当時の文学論の頑迷さを揶揄している。この発言は、妖精物語が、女性や子どもといった、18世紀に形成されつつあった学識人以外の新たな識字層に向けて²²⁾、質より量の読書熱²³⁾ に応えるために、市場に送り出されていたことを伝える証言として貴重なものである。

ベルトーフのように、売れる本を売るという商業主義的な出版が続けられていたからこそ、ますますメールヒエンという大衆向け読みものへの苦言が増すことになった。

「読書にいそむ輩の多くは、中身の乏しい悪趣味の本ばかりを読み、頭脳と心を病んでいる。そんな本ばかりに向かっていたら、気力が失われてしまう。読書で時間を潰すとはよく言ったものだが、こうした習慣がもたらす帰結はいかなるものだろうか。頭を全く使わない本、現実とはかけはなれた自然ではありえない奇跡が次から次へと登場する本、心の豊かさや良い趣味を伝えない本。こんな本ばかりを読んでいたら、当然のことながら、心の調子はくずれてしまう。」²⁴⁾

「無趣味の小説、幽霊譚、騎士物語などの読みものは、身体と心とを麻痺させる確実な方法といえる。」²⁵⁾

おなじような批判は、読書熱を支えた図書室や貸本屋にも向けられていた。

「貸本屋のような場所で、ゲーテ、ヴィーラント、ヘルダー、シラー、[ヨーハン・ヤーコプ・] エンゲル、[クリスチャン・] ガルヴェたちの名作に出会うことはとても稀なこと。そこで目にするのは、ぞっとするような魔法使いの登場する話、幽霊譚、騎士物語、妖精物語など。それから身の毛もよだつ怪談、預言書、信仰書の類いばかりだ。幼少の頃からメールヒェンや冒険譚ばかりに慣れ親しんでいるものだから、無教養の者たちは、珍談奇談の類いに目がない。当然、貸本屋の主人たちは、こうした趣味に目をつける。かれらは、不可思議なものがもりだくさんの旅行記や小説ばかりをごっそりそろえることになる。」²⁶⁾

むしろこうした苦言から、伝承や迷信に溢れた、妖精や魔女たちが登場する、メールヒェンと呼ばれた娯楽作品が、18世紀の読書熱を支えていたことがうかがえるだろう。しかしこうした読書環境こそが、グリムのメールヒェンが登場するための前提であった。18世紀のメールヒェンを扱った研究のなかで、マンフレート・グレーツは、こうした旧来のメールヒェンには、グリム以降のメールヒェンに類される伝承的な要素が多数含まれていただけでなく、「不可思議なもの」が満載された本がひろく読まれることで、自由な想像力が創作には必要であるという意識が行き渡り、「不可思議なもの」の脱魔術化が進んだと論じている²⁷⁾。つまり18世紀に大量のメールヒェンが読まれることで、「不可思議なもの」は、緊張感や場面展開といった純粋な文学的効果を演出するアイテムになったというわけだ²⁸⁾。

Ⅲ. メールヒェン評価の変化

メールヒェンは、熱狂的に受容された一方で、趣味のわるい読みものとして批判されていた。このような位置から、メールヒェンは、どのような段階を経由して、「家庭」と「子ども」の読みものに定着したのだろうか。この段階をたどるうえでは、読者としての「子ども」が鍵となる。

寓話と同じように、妖精物語もまた、その教育効果が限定的に認められていた。例えばポーモン夫人の『若者への徳と真理の教え』は、妖精物語を訓育教材として利用した教育書であった。

『若者への徳と真理の教え』では、母と娘たちの会話を地として、大小の妖精物語が組み込まれている。妖精に3つの願い事をかなえてやろうといわれた貧しい夫婦がソーセージで願い事を使い果たしてしまう『三つの願い事』²⁹⁾もこの本に登場する。この挿話に続いて、母は娘たちに願いごとを尋ねてみる。ひとりの娘は「世の中で一番賢い学者になりたい」と告白する。そこで母は、「確かに、学がなければ、世間知らずで礼儀知らずの女性になるかもしれません」³⁰⁾と、歯切れのわるい返事をする。母の対応には、女性には必要以上の学識は不要だとする立場が反映されていることは言うまでもない。事実、母と娘の対話には、歴史、自然誌、地理などの幅広いテーマが登場するが、表面的な説明に終始している。主眼はあくまでも、道徳や礼儀を教え込むことにあった。願いごとの話の続きをみておこう。別の娘は、「世の中で一番よい子になりたい」と告白する。それを聞いた母はよい願いごとだと答え、「本当に何かを願い、それが実現するようあらゆる努力を惜しまなければ、その願いは実現するのです」³¹⁾とまとめる。この一例だけでも、この本の訓育的な性格がわかるだろう。

ポーモン夫人の訓育本の翻訳者が寄せた序文には次のような言葉が確認できる。

「本書は、子どもたちによい教育を与えたいと心を砕いている親御さんに、真にお勧めできるものです。この本は、とりわけ女子の教育そして訓育のために編まれたものです。この目的のために、本書は極めて有益、数々の利点を引き出すことができます。[...] 女の子の方が、男の子よりも、多くを学ぶこともしばしばありますが、しかし女の子は全てを学ぶ必要はありません。女子教育は全く別の仕方でおこなわれなければなりません、まさに本書が示しているように。そう私〔翻訳者〕には思われます」³²⁾。

妖精物語と女性読者のつながりがここにも認められる。貴族の子息ならば騎士学校 (Ritterakademie)、牧師や下級の事務官ならば大学、商売や手に職をつけるならば見習いと、男児のような具体的な教育プランがまだ認められていなかった女子教育への関心の高まりに、妖精物語は上手く合致したということになる。

また妖精物語は、創作のモチーフとして活用されることにもなった。モーツァルトの《魔笛》の原案といわれるヴィーラントの『ジニスタン－厳選された妖精または幽霊のメールヒェン』(1786) は、その副題が示す通り、妖精物語をモチーフとした創作作品をおさめた物語集である。その序文で、メールヒェンが好きだからといって恥じ入る必要はないとヴィーラントは断っている³³⁾。不可思議なものを求めるのは、人間だれでも持っている性向、だからこそヴィーラントは、妖精物語を積極的に創作に活用した。

加えて、ヘルダーが準備したような新しい歴史観の後ろ盾によって、メールヒェンそのものへの肯定的な関心が成立した。ヘルダーは、人類の文化的な発展の度合いを、人間の成長に重ね合わせた歴史像を提供する。当時のヨーロッパよりも遅れているとみなされた新世界や東洋は、「いまだに

幼い人類が生きる黄金時代」³⁴⁾として理解された。ここでメールヒェンの「不可思議さ」も、幼年期の人類が作り上げたものとして受け入れられるようになる。「古代の民族や野生状態の民族の詩は、直接の対象、感覚及び創造の直接的な感激から生まれることがきわめて多い」³⁵⁾。つまり不可思議さは、「民衆の信仰の結晶、夢をみているかのような、感覚的な直感、力、欲求の結晶」³⁶⁾である。不可思議さは、感覚や想像力が産み出した、人類の古層に沈積する魂の辞書に近づくための糸口となる。ここにきてメールヒェンを伝承として文献学的または民俗学的に研究する扉がひらかれ、民衆詩 (Volkspoesie) や、グリム兄弟が称賛した作者のない自然詩 (Naturpoesie) への関心が一気に高まることになる。

しかしここでメールヒェンを、文学学や民俗学と関連させて、再発見された口承伝承や民衆詩として片付けてしまうと、その背後にあった問題の広がりをつえ損ねることになる。ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの民衆詩論を手がかりに、当時の論争をみておくことにしたい。

ビュルガーといえば、『ミュンヒハウゼン男爵の冒険』を思い起こすが、この男爵がホラを吹く逸話もまた、民間の伝承に由来するものであったことは周知の事実である。また戦死した若者が、許嫁のもとに現れ一緒に墓場まで連れて行くというバラード『レノーレ』(1774)も、ひろく伝承された幽霊譚(ヘルダーが『オシアン論』のなかで紹介した Sweet William's Ghost)をモチーフとするものであった³⁷⁾。こうしたビュルガーの創作活動を貫いていたのが、民衆詩の理念であった。詩論『ダニエル・ヴンダーリッヒの書から』(1776)のなかで、ビュルガーは、民衆詩を当時のドイツの作家たちへのアンチテーゼとしてうちだしていた。

ドイツの詩人たちが直面している過ちは、作品を民衆全般に向けていない点にある。この誤りを取り除くためには、「自然の書」を読まなければならない。「民衆全体を知る」こと、「想像力をそのふさわしい形象で満たし、

感受性に正確な狙いをつけるために、想像力と感受性を吟味する」³⁸⁾ ことが必要である。

想像力と感受性からうまれる「民衆詩」³⁹⁾ を、ビュルガーは、全民衆に受け入れられるべき詩の模範として掲げた。しかし、彼の民衆趣味には、シラーやフリードリヒ・ニコライをはじめとして数々の批判⁴⁰⁾ が向けられることになる。これらの批判の多くは、民衆詩が趣味の低俗化をもたらす点をつくものであった。

ただし民衆の趣味をめぐる議論の応酬は、実のところ同時代の別の論争の一つの変奏であったことをここで指摘しておかなければならない。『詩のポピュラリティーについて』(1789)と題された論考のなかで、ビュルガーは民衆詩の必要性を次のように論じている。「想像力と感覚こそが、すべての詩の源泉である。感覚に訴えないもの、想像力を働かせないようなものは、詩作から除外しなければならない」⁴¹⁾。民衆全体の想像力そして感受能力と調和することで、「真のポピュラリティー (Popularität)」⁴²⁾ が獲得されると。

ビュルガーが民衆詩で模索していたのは、ポピュラリティーであった。いささか唐突な感じもするが、この言葉から、ビュルガーの民衆詩論が、18世紀後半のポピュラリティーをめぐる論争に接続していることがわかるのである。そもそもポピュラリティーをめぐる論争は、真理や有益な技術をいかに人々に伝播すべきかを模索する啓蒙主義的な問題関心から必然的に生じてきたものであった⁴³⁾、しかし現在から振り返ってみるとこの論争は、印刷物が主要メディアになることで生じてきたあたらしい文化格差をめぐるものであったことがわかる。

「人間社会には、いくつかの集団が存在する。ある集団は、理論的な思弁よりも、まず動いてしまう者たち、とりわけ直感、感覚、知覚、観察力、想像力といった低級の心的能力が優位に働いている者たちからなる。彼ら

は、推論をへて結論を導出することよりも、結論を直接的に得て行為にいたってしまふ。このように感覚的または具体的に考えること、直感的な認識を必要としている人間の集団が、民衆である」⁴⁴⁾。

民衆という存在が、職業や生まれの違いという身分差ではなく、教育格差、つまり認識能力または思考能力の違いから規定されていることが、この定義から読み取れるはずだ。当時の知の伝播のスタイルに即して言い直せば、この格差は印刷メディアをめぐる格差、つまり文字情報にアクセスできる環境にあるのかどうか、情報にアクセスできる能力つまり識字率や読解力を有しているのかどうかに由来する格差であった。民衆にいかにしてメッセージを伝えるべきか、ビュルガーの民衆詩は、内容や表現の点で民衆に受け入れられる詩を模索したということになる。民衆に受け入れられる作品はどのようなものなのかという問いは、もちろん語られるものから本として読まれるものへと変化したメールヒェンも無関係ではなかった。メールヒェンの内容の乏しさや無趣味を批判する立場は、民衆に歩み寄る必要はなく、よい作品を発表し続けることで民衆の教化を期待する立場の表明であり、他方ベルトーフのような出版者は、不可思議さ満載のメールヒェンが、内容の点で民衆に好んで受け入れられていたことを熟知していた。そしてメールヒェンは、ポピュラリティーの獲得を模索するなかで、子どもに語るという新しい語り方と結びつくことになったと考えることができるのである。

『アーサー王と美しいユダヤの騎士—乳母のメールヒェン』(1786)⁴⁵⁾は、乳母の子どもへの語りを再現した作品であり、随所に、「そろそろねんねの時間かい」⁴⁶⁾、「さて、つづきを話すことにしよう」⁴⁷⁾といった、乳母の台詞に子守歌も(譜面付きで!)収録されている。クリストフ・ヴィルヘルム・ギュンターの『子どものメールヒェン』(1787)も、子どもに語る調子を採用していることで知られている。「子どもに語る調子(Kinderton)

は、最も軽妙であるだけでなく、誕生した当時の粗野な時代の単純さを刻み込んでいるメールヒェンを語るに、最も適したものなのです⁴⁸⁾。この引用から、「子どもに語る調子」に、古い伝承が有するであろう粗野さを演出し、伝承というスタイルを生き生きと再現する役割が期待されていたことが読み取れるはずだ。

編者ギュンターが、上述の引用のなかで敢えてこの口調を選択したと断っていることから、「子どもに語る口調」は、メールヒェンの数ある語り方のひとつに過ぎなかったことを忘れてはならない。

(ペローのメールヒェンの語り口を批判しつつ) 民衆のうちには子どもだけでなく大人もいるのだから、子どもと大人が一緒となった一座に満足できるような語り方をとる⁴⁹⁾と述べていたのは『ドイツ人の民話』(1782)の編者ムゼウスであった。ヴィーラントもまた、よい語りはあくまでも不可思議さともっともらしさのうまい調合にあり⁵⁰⁾、「[妖精物語を]創作するならば、趣味のある作品でなければならない。それがなければ無に等しい。乳母が語るかのような調子で、乳母のメールヒェンは語りつがれるであろう。しかしこうした語り口のは決して活字になることはないはず⁵¹⁾」と、子どもに語る口調はあまり評価していなかったのである。

それでは複数の語り口の中から、なぜ子どもに語る口調が選ばれることになったのか、その要因としてここで指摘したいのは、メールヒェンが語られるものから、読まれるものへと変化したのと同時に、子どもをめぐる価値観が変化したことである。「自分がアルカディアにいるかのように」と、ギュンターは、美化されたみずから子ども時代を根拠に、子どもに語る調子を選んでいった。それはアーサー王のメールヒェンの編者も同じだ。「あなた[編者の乳母]はメールヒェンがとても好きでした。わたしはあなたが語るメールヒェンが、いつだって好きでした。夜ひとりで机に向かっていると、過ぎ去った日々へと思いはうつろいます。何の責めも不安もなかつ

た子ども時代の満たされた夕べの情景で、私の心は一杯になるのです。あなたの心のこもった話し声、そしてその声にひかれてあなたの周りに集まった子どもたち、その光景はまるで母鳥が雛を見守っているかのようでした⁵²⁾。例えばここに、シラーが『素朴文学と情感文学』で繰り返し論じているような、子どもを素朴さとを結びつける議論を引き合いにだしてもよいだろう。子ども（または子ども時代）を純真さや素朴さと結びつけて美化するような価値観の浸透が、「子どもに語る口調」で書かれたメールヒェンを受け入れるための素地となったのである。

IV. 子どもに語る

ここでグリム兄弟に戻ろう。兄弟がメールヒェンを収集する際に、メールヒェンはどのような調子で語られたのだろうか。収集されたメールヒェンは断片的に書き留められたものであるがゆえに、グリム兄弟が聞き取った語りの調子の再構成は難しい。かれらにメールヒェンを提供したといわれる女性たちが、古い言い伝えを口承で伝えた文盲の農婦ではなく、教養ある出自の女性であることは周知の事実。彼女たちは、聞き手にあわせていくつもの口調を自由に選べたのではないだろうか。ひょっとしたら内容をかいつまんで説明しただけなのかもしれない。

グリムは童話集の序文の中で、メールヒェンを「できる限り純粹に」⁵³⁾理解することにつとめ、韻に気をまわすがために中断したり、アナロジーや類推で引き伸ばしたりしないと断っている。また洗練された書き言葉は、明晰さと判明さをもたらす反面、無味乾燥になるきらいがあるので、ある特定の方言で書くことができればよいとの希望をもらしていた⁵⁴⁾。グリムが「純粹に」理解し、そして特定の方言に代わる語り口として採用したのが、女性（母）が子どもに語るというスタイルであった。語り手としての女性という存在は、彼らのメールヒェン集を外から支える必要不可欠な

枠組みなのである⁵⁵⁾。このグリムの選択は大成功をおさめた。グリム以降のメールヒェンの多くは、子どもに語る調子で書かれるだけでなく、文字通り、子どもの読みものの地位をも獲得することになる。

当時の教育学の言説のなかにも、無視することのできない貴重な証言が残されている。エルンスト・クリスチャン・トラップは、人間が不可思議さを求めるのは当然の性向であるから、むしろ不可思議な話を聞かせて、この当然の欲求を満足させなければならないと説いた⁵⁶⁾ 教育学者である。彼の教育書の中に、「子どもと民衆は同じようになつかわれなければならない。十分にそして正しく彼らの関心を引き起こすように話すこと、これが両者の心をつかむ一番の方法となる」⁵⁷⁾ という主張が残されている。これは、下級教師 (Volkslehrer) が教鞭をとる時に、子どもたちの関心を引き起こすように語ることの重要性を説く文脈のなかで発せられたものだが、ポピュラリティーという観点からすると、子どもと民衆は同じ手法でアプローチできるという証言でもあるだろう。それは言いかえれば、当時の教育レベルからすれば当然のことだが、「子どもに語る口調」という子どもへの接近は、そのまま民衆という読者を獲得するための確実なアプローチだったのである。

とするならば、当たり前ながら、子どものためのメールヒェンは、民衆にも向けられたメールヒェンでもあったということになるだろう。ここで「子ども」と「家庭」という枕詞の含意もはっきりする。「家庭」は、「子ども」がメールヒェンを読み聞かされる親密な読書空間を意味していた。そして、メールヒェンを受け取る「子ども」には、大人たち民衆も含意されていたとすれば、この「家庭」は、家族が集う親密な空間であると同時に、民衆すべてが集えるような広大な空間を象徴していたことになる。さらに、グリムのメールヒェンは、この「家庭」の語り部の役割を、女性 (母) に引き受けさせたことも忘れてはならない。ヨーアヒム・ハンリヒ・カン

ペのベストセラー『ロビンソン・ジュニア』（1779）に描き出されているように、18世紀のかつての読書空間においては、子どもに本を読んで聞かせるという教育役は、あくまでも男性（父）の役目であったことを思い出さなければならない。

「子ども」と「家庭」の含意を再確認し、母という新しい語り部が登場したところで、グリムのメールヒェンとナショナリズムとの結びつきの痕跡も浮かび上がってくるのではないだろうか。メールヒェンの語り手、グリムに童話を提供したといわれるドロテア・フィーマンをはじめとする女性（母）を、女神ゲルマニアにおきかえてみたらどうであろうか。グリムのメールヒェンと同時期、フィリップ・ファイトやヨーハン・フリードリヒ・オーファーベックたちが描いたような、ゲルマニア女神の形象化がすすめられていたこともここでは無関係ではない⁵⁸⁾。グリムのメールヒェンは、母なるゲルマニアがドイツ民衆／民族（「子ども」）たちに語る、ドイツというひとつの文化空間（「家庭」）の誕生を告げ知らせているということが、ここであらためて確認できるのである。

引用・参考文献

- 1) Vgl. Rudolf Schenda, *Von Mund zu Ohr*, Göttingen 1993; Manfred Grätz, *Das Märchen in der deutschen Aufklärung*, Stuttgart 1988.
- 2) Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universallexicon aller Wissenschaften und Künste*, Leipzig 1731-1754, Bd. 19, Sp. 163.
- 3) Johann Christoph Adelung, *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*, Wien 1811, Band: M - Scr, Sp. 33-34.
- 4) *Ökonomische Encyclopädie*, Bd. 82, S. 791.
- 5) Vgl. *Damen Conversations-Lexicon*, Leipzig 1834-1838, Bd. 4, S. 94.
- 6) Johann Christoph Gottsched, *Versuch einer Critischen Dichtkunst*, 3. Aufl., Leipzig 1742, Cap.V, §16.
- 7) Vgl. Gottsched, a. a. O., Cap.V, §16 und 19.
- 8) Vgl. Gottsched, a. a. O., Cap.VI, §1.

- 9) Ebd.
- 10) Vgl. Gottsched, a. a. O., II. Theil, I. Hauptstück, Von äsopischen und sybaritischen Fabeln, §1.
- 11) Ernst Ludwig Daniel Huch, *Aesopus oder Versuch über den Unterschied zwischen Fabel und Märchen*, Wittenberg und Zerbst, 1769, S. 134.
- 12) Huch, a. a. O., S. 137.
- 13) [Johann Georg Schmidt,] *Die gestriegelte Rocken=Philosophie*, Chemnitz 1718-1722.
- 14) [Erasmus Francisci,] *Samlung vieler auserlesener und seltener Geschichte, und merkwürdiger Begebenheiten*, Nürnberg 1753.
- 15) Peter Schlemihl (Pseud) (Hg.), *Wunder= Sagen= und Gespensterbuch. enthaltend: Spuck= und Geistergeschichten, Volksmärchen, Legenden und Historien*, Wien 1835.
- 16) Manfred Grätz, *Das Märchen in der deutschen Aufklärung*, Stuttgart 1988 S.31-87; Ernst-Peter Wieckenberg, *Johann Heinrich Voß und «Tausend und eine Nacht»*, Würzburg 2002, の前半などを参照のこと。
- 17) Bertuch [Hg.], *Die Blaue Bibliothek aller Nationen*, Weimar 1790-1800, Bd. 1, Ankündigung, [S. 1.] (原典はノンブルなし)
- 18) Bertuch, a. a. O., [S. 2-3]
- 19) Bertuch, a. a. O., [S. 5.]
- 20) Bertuch, a. a. O., [S. 2.]
- 21) Ebd.
- 22) 下記研究書に掲載された統計資料を参照のこと。Helmuth Kiesel und Paul Münch, *Gesellschaft und Literatur im 18. Jahrhundert*, München 1977.
- 23) Vgl. Reinhard Wittmann, *Geschichte des deutschen Buchhandels*, München 1991, S. 183.
- 24) Johann Adam Bergk, *Die Kunst, Bücher zu lesen*, Jena 1799, S. 411f.
- 25) Johann Ludwig Georg Schwarz, *System einer unvernünftigen Policey*, Basel 1797, S. 119.
- 26) [Friedrich Reinhard Rücklefs,] Über das Bedürfnis einer Censur für Leihbibliotheken, in: *Deutsches Magazin* (1796; Julius-Dezember) S. 239ff.
- 27) Grätz, a. a. O., S. 149f.
- 28) Grätz, a. a. O., S. 262.
- 29) Frau Maria le Prince de Beaumont, *Lehren der Tugend und Weisheit für die Jugend*, Halle 1754, S. 200-203.

- 30) Frau de Beaumont, a. a. O., S. 203.
- 31) Ebd.
- 32) Frau de Beaumont, a. a. O., S. 7.
- 33) Christoph Martin Wieland, *Dschinnistan oder auserlesene Feen= und Geister=Mährchen*, Winterthur, 1786, S. III.
- 34) Johann Gottfried Herder, *Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit*, in: Ders., *Sämtliche Werke*, hrsg. von Bernhard Suphan, Bd. 5, S. 481, なおヘルダーの歴史観とメルヒェンとの関連については下記研究書を参考にした。Walter Pape, *Das literarische Kinderbuch*, Berlin 1981.
- 35) [Herder,] Auszug aus einem Briefwechsel über Ossian und die Lieder alter Völker, in: *Von Deutscher Art und Kunst*, Hamburg 1773, S. 46.
- 36) Herder, Von der Aehnlichkeit der mittlern englischen und deutschen Dichtkunst nebst Verschiedenem, was daraus folget, in: *Deutsches Museum*, Bd. 2 (1777) S. 421-435; hier S. 424f.
- 37) 糟谷恵次「G. A. ビュルガーの『レノーレ』における詩的影響の諸相」『駒沢女子大学研究紀要』第1号（1994）, pp. 159-169；同著者「G. A. ビュルガーのバラード『レナルドとブランディエーネ』をめぐる批評の問題」『駒沢女子大学研究紀要』第3号（1996）, pp.71-87.
- 38) Vgl. Gottfried August Bürger, Aus Daniel Wunderlich's Buche, in: Ders., *Sämtliche Werke*, Bd.7, Göttingen 1833, S. 118-140, hier S. 126.
- 39) Bürger, a. a. O., S. 132.
- 40) Vgl. Hans Jürgen Geerds, Schiller und das Problem der Volkstümlichkeit, dargestellt an der Rezension „Über Bürgers Gedichte“, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift der Friedrich Schiller Universität Jena*, Jg. 5 (1955/56), S. 169-175.
- 41) Bürger, Von der Popularität der Poesie, in: Ders. *Sämtliche Werke*, Bd.7, S. 140-150; hier S. 148f.
- 42) Bürger, a. a. O., S. 149.
- 43) Holger Böning, Nachwort, in: Johann Christoph Greiling, *Theorie der Popularität*, (Nachdruck: Stuttgart 2001), S. 183-198.
- 44) Greiling, a. a. O., S. 4-5.
- 45) [Johann Ferdinand Roth,] *Vom Könige Artus und von dem bildschönen Ritter Wieduwilt-ein Ammenmährchen*, Leipzig 1786. なおユダヤ人騎士 Wieduwilt については、下記の研究からその問題の広がりやうかがうことができる。Achim Jaeger, *Ein jüdischer Artusritter*, Tübingen 2000.

- 46) Roth, a. a. O., S.39.
- 47) Roth, a. a. O., S.58.
- 48) Chr. Wilhelm Günther, *Kindermärchen aus mündlichen Erzählungen*, Erfurt 1787, S. XVII.
- 49) Johann Karl August Musäus, *Volksmärchen der Deutschen*, Gotha 1782, Vorbericht, S.9.
- 50) Vgl. Wieland, a. a. O., S.VI.
- 51) Wieland, a. a. O., S. XV.
- 52) Roth, a. a. O., S. 8.
- 53) Brüder Grimm, *Kinder= und Haus=Märchen*, Berlin 1812, S. XVIII.
- 54) Brüder Grimm, a. a. O., S. XXf.
- 55) Vgl. Heinz Rölleke, Die Brüder Grimm in Spinnstuben, dämmrigen Küchenwinkeln und an Kohlenmeilern? in: Ders., *Wo das Wünschen noch geholfen hat*, Bonn 1985, S. 121-132.
- 56) Vgl. Trapp, Vom Unterricht überhaupt, in: *Allgemeine Revision des gesammten Schul= und Erziehungswesens*, Wien und Wolfenbüttel 1787, S. 152.
- 57) Trapp, a. a. O., S. 149.
- 58) Vgl. Isabel Skokan, *Germania und Italia*, Berlin 2009.

(文学研究科准教授)

RESÜMEE

Märchen für Volk als Kinder

— Studie über rezeptionsgeschichtliche Unterschiede zwischen dem vorgrimmischen Märchen und dem Märchen der Brüder Grimm

Kotaro YOSHIDA

Diese Abhandlung thematisiert Unterschiede zwischen dem Märchen des 18. Jahrhunderts und dem Grimm'schen Märchen. Das vorgrimmische Märchen des 18. Jahrhunderts bezeichnet nicht unbedingt eine volkstümliche Erzählung, die mündlich überliefert wurde, sondern allgemein eine erdichtete Erzählung. Im Kontext der damaligen an Aufklärung orientierten Literaturkritik wurde das Märchen wenig geschätzt, weil es viel Wunderbares, z. B. Feen, Hexen, Magie, als ein wesentliches Element enthält. Anfang des 19. Jahrhunderts ändert sich diese Situation, als die Brüder Grimm beginnen, volkstümliche Märchen zu sammeln und als „Kinder- und Hausmärchen“ herauszugeben. In dieser Studie werden der Wandel in der Rezeption sowie der Intention der Verfasser/Herausgeber von Märchen vom 18. zum 19. Jahrhundert untersucht, und dabei wird eine historische Diskussion über Popularität in Betracht genommen. Es wird deutlich gemacht, dass das Problemfeld der Popularität für das Entstehen von der Märchensammlung der Brüder Grimm eine große Rolle spielte.